JISSEN vol.05

FREE

龍谷大学大学院
実践真宗学研究科情報誌

グチコレ
Jissenjya Project
臨床宗教師実習
院生個人研究
実践報恩講
院生法話
本の紹介
ビハーラ本願寺夏祭り

～道行く人のグチを聴く～ グチコレ

『グチコレ』とは「グチコレクション」の略で、京都で仏教を学ぶ学生を中心とした有志のグチコレクターが、街行く人々のグチ(愚痴)を聴き、集め、浄土真宗本願寺派のホームページである、「他力本願・ネット」で公開していく活動です。「グチ」はもともと仏教語で、煩悩の一つと示されます。また、一般的には悪口や弱音というようにネガティブに捉えられがちなグチですが、グチコレクターはグチを本音と向き合うポジティブなものと捉え、気軽にグチを言い合える社会を作っていきたいと考えています。悩み多き現代人には、ためこんだグチをこぼす場所が必要なのかもしれません。時には、公開された他人のグチに共感し、ほんの少し気持ちが楽になることもあるでしょう。

京都タワー下での活動風景

グチコレクター達は今宵もまた、どこかの街に繰り出して、人々の尽きないグチを聴いています。

実践真宗学研究科二年次生
グチコレ代表　黒瀬英世

あやべ食育フェスティバルでのグチコレ

≪グチコレに参加して≫

実践真宗学研究科三年次生
朋澤融智

私が路上で愚痴を聞くことを始めたのは、自分の中で様々思うところがあったからです。その一つが人見知りの克服でした。「克服できたか？」と聞かれると、出来たとは言えません。今でも初対面の方と話すときは緊張します。しかし、路上で人と関わっていく中で自分の中に初対面の人と話せるスイッチがあることに気がつきました。それが入ったとき人見知りはしていない・・・はずです。スイッチの発見もそうですが、愚痴を聞いていく中で自分の知らない自分を知ることが出来ました。そして周りの人から自分がどう見えているのか、少しわかるようになりました。というのも、愚痴を言いに来て頂ける方の気持ちを考えたとき、せっかく愚痴を話すのなら聞いている人に共感してもらいたいですよね。多分似たような経験をしてそう・わかってもらえそうな人に話すのではないか、と私は最近考えています。私は「恋人がいない」という愚痴を聞くことが多いので・・・。色んな人の愚痴を聞くことで、そういった発見があるとは始めた時は思っていませんでした。他者と関わっていく中で自分を振り返り自分を知る機会になること、そして様々な人の人生経験に触れていくことが、充実した大学院生活につながっていったと思います。今まで愚痴を言って頂いた方には感謝の気持ちでいっぱいです。

東日本⇔京都交流・相談会
in 聞法会館

まるごとマルシェ in 興正寺

Jissenjya Project

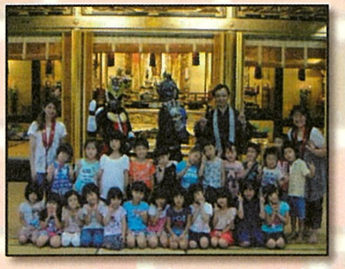
「ジッセンジャープロジェクト」とは、浄土真宗の新たな視聴覚伝道の一つです。実践真宗学研究科の活動は様々ありますが、子どもを対象とした活動はまだまだ少ないように見受けられます。

現代の子どもは様々な娯楽に囲まれています。そんな中で子どもにお寺に来てもらう為には、これまでの子どもへの伝道方法も大切にしつつ、現代社会に対応した新たな伝道方法が求められているのではないでしょうか。そこで、「伝道×ヒーローショー」ということで、「ジッセンジャープロジェクト」を私たちは活動しています。

この「ヒーローショー」というのも単なるヒーローショーではありません。一つには、ヒーロースーツ・ストーリー・舞台・演出、全て自分たちで作り上げていきます。二つには、ストーリーがヒーローショー特有の勧善懲悪ではなく、最後は阿弥陀様がキャラクターとして登場し、善の象徴であるヒーローと、悪の象徴である敵怪人を諭して、互いに認めあうことの重要さを説きます。善の象徴と悪の象徴が争い、それに決着を着けないことにより、社会的な善悪の不完全さを説きます。そうすることにより、このヒーローショーを通して自分自身を見つめ直すきっかけになるのではないでしょうか。

そのような、仏教・浄土真宗の思想を取り入れたストーリーがこのヒーローショーの大きな特徴の一つになっています。

実践真宗学研究科二年次生　ジッセンジャープロジェクト代表　西脇大成


佐賀県正法寺での公演後みんなで記念撮影

広島県の保育園でプレ公演

公演の後にはまとめの法話も

Jissenjya Projectは現在、全国各地のお寺や保育園、NPOの施設など7ヶ所で講演しました。Facebook（https:www.facebook.com/JissenjyaProject）にて活動報告もしておりますのでぜひご覧ください！！

Jissenjya Projectでは随時公演の依頼を受け付けております。公演の依頼やご質問に関してはGmail(jissenjya@gmail.com)までご連絡ください！！

－臨床宗教師課程創設－

「臨床宗教師」－初めてこの言葉を聞かれた方も多いのではないだろうか。２０１２年度に、東北大学で臨床宗教師養成プログラムが創設され、２０１４年度からは、龍谷大学大学院実践真宗学研究科でも開始された。臨床宗教師というからには、やはり宗教者を指すのだろう。では、「臨床宗教師」とはどのような宗教者か？「臨床」とは何か。疑問は尽きない。

そもそも、宗教者の活動する場所とは、一体どこであろうか？お寺や教会といった、宗教施設。信者の方のお家。冠婚葬祭の場。色々と思い浮かぶかもしれないが、現在の主な活動場所は、こういったところではないか。主に、同じ宗教を信仰している方々がいらっしゃるところで活動している。

では、「宗教」の意義とは何だろうか。それは「救い」、自らが救われていくことに他ならない。同時に、自らだけでなく、全てのいのちが救われることを願いとする、それが「宗教」である。「救い」のあり方は、それぞれの宗教・宗派によって異なる。しかし、そこには共通の願いがある。全てのいのちが大切であり、救われてほしいという願いに基づいているのである。その願いを受けた宗教者の活動場所は、他にもあって然るべきではないのか。

今年度臨床宗教師研修を受けたメンバー
写真は東北教区ボランティアセンター前

同じ宗教を信仰していなくとも、宗教自体を信じていなくとも、苦しみを抱えている方の心の奥底にある叫びを聞き、寄り添っていくことも、宗教者の責務ではないのか。こういった想いを現実にするかたちで、臨床宗教師を養成するプログラムは始まったのである。

臨床宗教師は、自らの信仰する宗教の布教を目的として行動はしない。場合によっては、異なる信仰を持つ宗教者と協力することもある。さらには、宗教者だけでなく、様々な分野の専門家の方々と協同していくことが求められる。根底にあるのは、苦しみを抱えている方に寄り添っていく中で、共に支えられ、生かされているいのちであることを尊重していくということである。

「臨床宗教師」－それは、宗教の持つ願い、全てのいのちが大切であり、救われてほしいという願いを実現させようとする、宗教者のあり方の一つなのである。

実践真宗学研究科二年次生　入江楽

特別養護老人ホーム「常清の里」での実習

【臨床宗教師研修の目的】

「臨床宗教師」は、日本版チャプレンであり、公共空間で信徒であるなしに拘わらず、人々の悲しみに寄り添い、心のケアを実践する宗教者を指す。この臨床宗教師研修は、宗教者としての全存在をかけて人々の苦悩や悲嘆に向き合い、そこから感じ取られるケア対象者の宗教性を尊重し、公共空間で実践可能な「宗教的ケア」を学ぶことを目的とする。そのために東北大学大学院と同じくし、次の五点を習得することを目指す。

①「傾聴」と「スピリチュアルケア」の能力向上
②「宗教間対話」「宗教協力」の能力向上
③自らの死生観と人生観を養う
④宗教者以外の諸機関との連携方法を学ぶ
⑤広い「宗教的ケア」の提供方法を学ぶ

-院生個人研究-

「自死問題における僧侶の役割」

現在日本では、3万人近い人々が毎年自死で亡くなられている。平成10年から平成23年までの14年間は毎年自死者が3万人を超えるという状況が続いていたが、平成24年では、ようやく3万人を下回った。しかし、年間の自死者数が減ったからと言って、今までの自死で亡くなった人たちの数が減っていくというわけではないのである。そもそも、この問題は数字で語ることのできるものではないと考える。自死で亡くなった人たち、1人ひとりに、それぞれの苦しみや思いというものがある。

自死者1人につき、自死遺族（自死によって強く影響を受けた友人や同僚なども含む）とされる人が5～10人いるとされている。そのような状況の中で、我々が僧侶という立場で活動していく上で、自死によって亡くなった人の葬儀やご門徒からの自死に関する相談など、自死について問われる機会というものが必ずと言っていいほどあるのではないだろうか。しかしながら、その様な場面において、僧侶側が自死に関して誤った認識をしていたり、偏見をもって接することになれば、自死遺族、自死念慮者に対して大きな傷を与えてしまうことになる。

特に僧侶が、葬儀などを通して関わる場合が多いであろう自死遺族への関わり方や配慮というものは、僧侶という立場として、常に考えておかなければならないことであるように思うのだが、現状として私自身も含め僧侶が自死遺族の感情や思いに寄り添った関わりが出来ているかといえば、必ずしもそうでない場合が多いように思える。しかし、この問題に対して、僧侶の担える役割は大いにあるのではないかと思う。それは、私自身が実際に、自死問題に取り組んでいる僧侶の活動に参加し、そこでの経験を通して感じたことである。

僧侶として、すべての苦しみ・悲しみを取り除くことは不可能であろう。しかし、そのような自死による苦しみ・悲しみを抱えた人たちが僧侶との関わりの中で、少しでも安心できる時間があるということも事実である。

今後は、この問題に関わっていく上で、どのように当事者へ寄り添うことが出来るのかを宗教の視点から見ていくと同時に、現場での実践を通して、僧侶としてどのようなことが求められているのか、また、どのような役割を担っていけるのかを模索していきたいと考えている。

実践真宗学研究科２年次生
木下祥悟
龍谷大学文学部真宗学科卒

「日本における寺院活動の可能性―お寺は寄合の場になりえるのか―」

私はお寺で生まれお寺で育ち、中学・高校と宗門関係の学校へと進学した。しかしながら、そこでは仏教に対する人々の熱意は感じられず、それどころか宗教を信じることへの嫌悪感さえも感じられたのである。「お寺って入りにくい」「お葬式の時にしかお坊さんって見ない」「税金払わなくていいよね」など、イメージの悪い言葉もたくさん聞いた。そのようなことから、私自身も宗教を学ぶことを嫌忌していたのである。そのような経験から、高校卒業後は宗教とは全く関係のない学校へ行こうと決意した。そんな私が龍谷大学へ編入学しようと考えたのは、短期大学時のアメリカ留学での経験からである。短大在学時には英米文学を専攻しており、1年次の後期にアメリカへ短期だが留学を経験した。短大へ入学した当時は、卒業したら英語を使う仕事がしたいと漠然とした目標しか持っておらず、編入という考えは全くなかった。しかし、ホームスティ先のファミリーに連れられ、教会の日曜礼拝に行ったとき、さらにファミリーに「信仰している宗教はある?」「仏教ってどんな教え?」と聞かれ、全く答えられなかったという経験から、私の中に龍谷大学への編入という選択肢が生まれたのである。教会で見た情景は、やはりキリスト教の国アメリカ、とまで言われるとおり圧巻であった。宗教に対する絶大な熱意を垣間見ることができた。

このようなアメリカでの宗教のあり方を見て、どうにか日本の寺院活動と繋げられないか、日本のお寺でも楽しく教えに出遇ってほしいという気持ちが湧いた。しかし、それには限界があり、たくさんの課題もある。そこで、まずは身近に感じられるお坊さんということで、路上でグチを聞くことにした。

私は学部4年次の後期、実践真宗学研究科の先輩方が中心となって活動をしている“グチコレ”に参加し始めた。最初は、先程も述べたようにお坊さんを身近に感じられたいという考えからである。しかし、活動をかさねるにつれて、傾聴するということの大切さや聞くだけということの難しさ、さらに、普段では関わることのできない人々との交流など、考えても見なかったような学びがあった。一宗教者として人々の苦しみ・本音に寄り添うことは、言葉では簡単に言えるが行動にするのはとても難しいことであると、肌で感じることができたのである。

さらには、実践真宗学研究科1年次の夏、ハワイへと研修に行き実際に見たことのなかったアメリカでの寺院活動を目にすることができた。アメリカと日本では、どうしても文化や環境、宗教に対する価値観も違う。しかしながら、私は日本の寺院は「寄り合いの場」になり得ると考える。まだまだ模索中のところが多いが、今後研究を重ねていきたいと考える。

実践真宗学研究科１年次生
森川瑞希
龍谷大学文学部真宗学科卒

実践報恩講

親鸞聖人のご命日に勤められる報恩講。浄土真宗では年中法要の中でも最も大切にされている。
実践真宗学研究科でも毎年１１月に報恩講をお勤めしている。

《今回の報恩講で導師を務めた鎌倉義雄さんへのインタビュー》

【報恩講にかける思い】

僕はあまり声を出すのが得意ではないので導師を務めると決まった時は不安で一杯でした。あと、我ながら情けないことですが、心の奥には「やりたくないな～」と思ってしまう自分もいました。ですが、同時にやるからには中途半端なことはしたくないとも思いましたね。共に練習している皆さんや教えてくださっている先輩方を見て、その思いは一層強くなりました。報恩講の当日では不安もありましたが「よし！頑張るぞ」という気持ちの方が大きくなっていましたね

導師を務めた１年次生の鎌倉さんと
勤式部会の皆さん

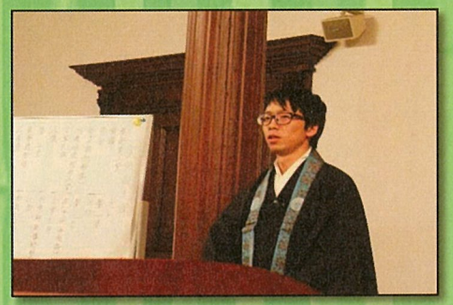
【報恩講にあたって苦労したこと】

やはり、一番苦労したことは、往生礼讃をお勤めするにあたって初重、二重、三重の音をそれぞれ取っていくことでした。自分の声がどの位の高さなのか、どういう声がどの音なのかなんて普段考えていなかったので、自分の声をどうすれば上手く上げ下げ出来るのかさえ、始めは良くわかりませんでしたね。1月やそこらで出来るようになるとは思っていませんでしたが、結局最後まで目当ての音をすぐに出せるようにはなりませんでした。本当に当日何事もなく勤められてホッとしています。

普段から練習していた雅楽を披露
見事に越殿楽を演奏しました

【報恩講を終えて今、何を思うか】

始めは「やりたくないな」「どうして自分が」と心の中でも愚痴を溢していました。けれども、今は導師として勤めさせていただけて本当にありがたかったと感じています。僕が導師としてお勤め出来たのは多くの方々の支えがあったからです。そのことを忘れず、来年の報恩講では、導師を務める子を今度は僕が支えて行けるように頑張って行きたいと思います。ありがとうございました。



法話者を務めた１年次生の吉井さん
今回は「いのち」の話をしてくださいました

院生法話

阿弥陀さまがいてよかったね

実践真宗学研究科三年次生
赤澤英海

「阿弥陀さまがいてよかったね」
そう思わせていただいた時、「浄土真宗のお坊さんでよかった！」と実感します。

この文章を書き始める二週間前、大好きだった祖母が浄土に還られました。

入院していた病院から学校のため京都に行った2日後だったため、祖母が亡くなった連絡を受けた時、信じられない気持ちでした。信じられない気持ちのまま、導師を勤める寺院の副住職さまに次のようなメールを送りました。

この度も、○○寺様にはお世話になります。
「阿弥陀さまがいてよかった」と実感し合える仏縁になればと思います。
どうか、宜しくお願いします。

京都での用事を済ませ、急いで四国へ戻りました。帰り道が事故で大きく渋滞しており、四国へ着いたのはお通夜が終わって一時間後でした。その日は本堂で祖母の遺体と二人きりで寝させていただきました。今にも動き出しそうな祖母の顔を夜中に何度も見ながら、祖母の笑顔を思い出すと、涙が止まらなくなりました。

その時に、副住職さまに上記のようなメールを送りましたが、本当は、私が祖母に「阿弥陀さまがいてよかったね」と声をかけたかった。そして私が安心したかったのだと実感しました

慈光はるかにかぶらしめ
ひかりのいたるところには
法喜をうとぞのべたまふ
大安慰を歸命せよ

『聖典全書』二巻三四〇頁

つらさや悲しさがいつ襲ってくるかわからない私たちを、慈しみの光で包み、大いなる安らぎを与えようとはたらき続けておられる阿弥陀さまです。

つらさや悲しみの堪えない人生の中だからこそ、「阿弥陀さまがいてよかったね」と実感し合える場に安心させられ、「前を向いて生きよう」と感じさせられます。そんな阿弥陀さまのすくいを味合わせていただくご縁でありました。

一生に人が出会う人の数は3万人程らしいです。世界の人口は７２億人程ですので、人と人が出会う確率はおよそ２４万分の1と考えられます。その中で、「阿弥陀さまがいてよかったね」と讃え合える関係になる方はどれ位いらっしゃるでしょうか。

浄土真宗のお坊さんとして、一人でも多くの方と「阿弥陀さまがいてよかったね」と法を喜び合えたらなと思わせていただくところです。

ビハーラ本願寺 夏祭り

２０１４年７月２６日（土）、私たち実践真宗学研究科の１年次生は、京都府城陽市にあるビハーラ本願寺の夏祭りに参加させていただきました。（事前の準備ももちろんですが、当日も）一日中動いていたので、最後の片付けまで終わったときには、とても大きな仕事をやり終えたような、気持ちのよい疲労感と達成感を得ることができました

午前中は施設の方やボランティアの方と一緒に机や椅子を運んで、参加者の方が使えるように会場のセッティングを行いました。とても暑い一日だったのですが、みんなで分担しながら準備を進めることができました。

５月から何度もミーティングを重ね、当日に向けて準備を行っていきました。６月頃からはみんなで協力し合いながら、担当のブースに向けて作業を行いました。

夏祭りが始まると、私たちはうちわとミサンガという、二つのブースに分かれて活動を行いました。うちわのブースでは、ペンを使って絵を書いたり、シールを貼ったりして、みんなが思い思いのうちわを作ってくれました

１年次生１５人全員で初めて取り組んだ行事だったのですが、たくさん話し合ったり協力し合ったりすることを通して、みんなの絆を深めることができました。また、地域の方や施設の方など多くの方々と触れ合うことができ、本当に充実した時間を過ごすことのできた一日となりました。

実践真宗学研究科 一年次生　南紫縁

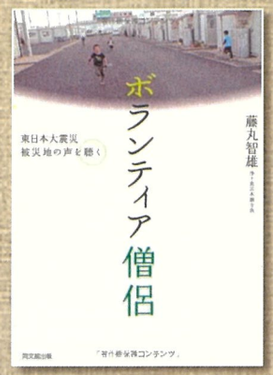
『JISSEN vol.5』
2015 年 4 月 1 日発行
発行：実践真宗学研究科
製作：実践真宗学研究科各部会
編集：実践真宗学研究科出版部会

〒600-8268
京都市下京区七条大宮東入大工町 125-1
龍谷大学清風館 3F 実践真宗学研究科合同研究室
TEL：075-366-0621
MAIL：r.jissen.publish@gamil.com

【表紙】題名：『縁起（つながり）』
作者：吉井直道（実践真宗学研究科１年次生）

※この活動情報誌『JISSEN』は、龍谷大学大学院実践真宗学研究科の院生が、実習の一環として主体的に取り組み発行するものです。

本の紹介



『ボランティア僧侶』
藤丸智雄 著
同文館出版

著者である藤丸智雄は、浄土真宗本願寺派総合研究所研究員である。本書では、藤丸智雄が同じ浄土真宗本願寺派僧侶である安部智海（アベちゃん）と金澤豊（金やん）の二人の被災地での「傾聴活動」を記録したものである。

この二人の被災地での傾聴活動というものは、東日本大震災から5ヶ月後の２０１１年８月から開始されている。そして、傾聴活動やボランティアなどを通して、被災地で生活されている様々な人と出会うのであるが、その中で震災当時の悲惨な状況やその後の生活で生じる不安や悩みなどを被災地の人々から語られるのである。時には「死」ということについて問われている場面もある。そこから、我々が日頃テレビや新聞などでは知ることのできない現場の様子というものが伝わってくる。

二人の僧侶の活動から、相手の苦悩を聞き、共に悩むという姿勢に、僧侶として人々の「苦悩に寄り添う」ことの可能性を感じた。

本書の中では、他にも様々な「実践」においてのヒントとなるような言葉が多く散りばめられている。被災地での活動に限らず、現代社会での僧侶と人々との関わり方の姿勢について考えさせられる一冊である。

実践真宗学研究科2年次生　木下祥悟

『寺よ、変われ』
高橋卓志 著
岩波書店

本書の著者である高橋卓志氏は、長野県松本市の臨済宗神宮寺住職であり、現在龍谷大学客員教授として実践真宗学研究科で講義も持たれている。また社会問題に対しても積極的に取り組まれている方である。

本書では現代に対応する寺院のあり方を考え、寺院改革について述べられ提唱されている。それは現代の社会状況を踏まえながら、僧侶・寺院は一般の方々からどのようにみられているのか。そして今後どうあるべきなのか。等について厳しい視点を持ち述べられている。その一節に「坊さん社会は、能力の優劣にあまり関係のない長老主義と大寺権威主義という堅固なヒエラルキーの中にある。（中略）それは努力しなくても生きていける独特の社会なのであり、いくつもの権威らしきものに護られて閉鎖的依存社会でもある」と述べる。

これは伝統仏教教団に生きる「私」への問いかけであると受け取ることができる。高橋卓志氏は、このような現状について「現代の寺院は死にかけている」と指摘し、今後の寺院のあり方について寺院は、「いのち」にかかわる難問（四苦）にアクセスし、その問題に寄り添うのが僧侶であり、その拠点として寺院があると語られる。このような主張は、法要中心の寺院のあり方に警鐘を鳴らしている。そして従来の固定概念にこだわらない新たな寺院のあり方を本書で提示しているのである。そのことについては本書を読んでいただき確かめて欲しい。

実践真宗学研究科2年次生　藤實乗教